

### 13. 《寝殿造りを復活したら?!》

中世温暖期の平安時代は、現在より平均気温が2℃ほど高かったと推察しています。そのとき、平安京に、“寝殿造り”という住居スタイルが流行。それは、一区画の敷地に水を引き入れ、高床式の建物群を配置するものです。

建物は、いわばワンフロアの大部屋で、床はフローリング（板張り）で、ゴザを座布団代わりに敷き、カーテンのような几帳（きちょう）で空間を仕切りました。衣服は、重ね着の十二単衣（ひとえ）でした。

こうした流行は、地球温暖化適応策を反映しています。

まず、水を敷地に引き入れることにより、敷地全体がクーリングされます。常時、打ち水されている状態なのです。ゲリラ豪雨も、住居の床を高くしておくことで、浸水被害を軽減できたことでしょう。そういえば、菅原道真が死んで雷神になったという民間伝承（注）は、温暖化による積乱雲の発達とカミナリの多発を示唆しています。

ワンルーム構造とフローリングは、暑さを凌ぐにはもってこいの住居環境でした。しかし冬は寒いので、十二単衣が考え出されたのではないか。その証拠に、寒冷化して武家政権時代になると、襖（ふすま）などで小部屋に仕切られ、床には畳が敷かれるように変わります。武士の服装は、十二単衣より簡素になりました。

現代に、平安時代の知恵を活かして街づくりをしたら、どうなるか。例えば、神田川沿川を再開発する場合には、ビルを高床構造とし、敷地内に川水を引き入れて涼気を誘い込み、水景が楽しめる、・・そのような寝殿造りストリートがあっても良いと思います。臭い神田川を何とかしなければなりません、・・。

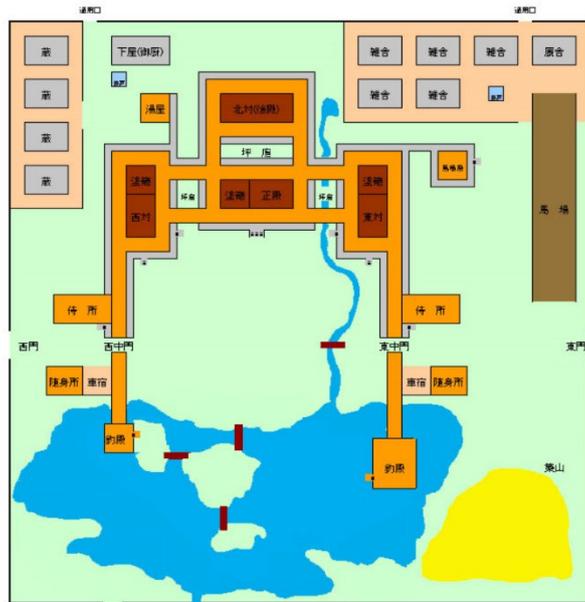
注：カミナリが鳴ると、クワバラ、クワバラとつぶやく風習があります。これは、菅原道真の領地である桑原を唱えているのです。雷神は、自らの領地にカミナリを落とさないという考えが、広まったのです。

写真は、①水のある庭に面した高床式住居で話している十二単衣の紫の上と光源氏（Wikipediaより 土佐光起筆『源氏物語画帖』より「朝顔」。雪まろばしの状景。）、②寝殿造り（図解・寝殿造 原図：冷泉 作画協力：村内）、③寝殿造りストリアートのイメージ（東京都「神田川河畔まちづくり考え方」の参考模式図に、細見が落書きした）

①



②



③

(参考模式図)

### 寝殿造りストリートを考えてみた

(「神田川河畔まちづくりの考え方」を基に)

